社会·経済システム学会
1998年　第17回大会
報告要旨集

＜21世紀のリテラシー＞

1998年10月24·25日

京都精華大学

目　　次

第17回大会よびかけ 「21世紀のリテラシー」 …… 学会理事会 1

＜報告＞

消費者と私的自治への回帰 －消費者保護基本法を超えて－…… 稲葉 紀久雄 2

社会システム論的生活構造論学説史批判と現代生活情報論の科学性批判
…… 三石 博行 4

公益・公共の視点から見た社会経済(非営利)ｾｸﾀｰの機能とその役割 金川 幸司 6

地域情報化における地方自治体ホームページの役割…… 津川 誠司 8

自治体情報システムのパソコン化による継続性への課題…… 小川 晴幹 10

交通問題を含めた移動関連システムの理想化設計…… 堀内 義秀 12

＜記念講演＞

組織論に対する数理的システム論のアプローチ…… 高原 康彦 14

＜報告＞

中間単位の社会システム論的考察…… 徳安 彰 15

意味世界の多元化とそのマネージメント…… 出口 弘 17

知識生産拠点の共存原理としての知識接続…… 奥田 栄 18

ﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ論の視点から見た我が国における21世紀の大衆音楽ﾘﾃﾗｼｰ
－CMソング、テーマソング、そして、カラオケ－…… 岸本 裕一 20

子どもの情報リテラシーと家庭の教育力
－性情報をめぐる大人の翻訳機能と子どもの育ち－…… 奈良 由美子 22

情報ﾘﾃﾗｼｰ習得に適した生涯学習支援情報通信ｼｽﾃﾑの一方式…… 津田 達 24

都市生活とリテラシー…… 日下 正基 26

社会の機能的分化 －意味構成の単一化か、多様化か？－…… 赤堀 三郎 28

意味空間の多元化と行為主体…… 中山 慶子 30

台湾、香港における日本番組の受容と意味空間の問題…… 渡辺 聡 31

新しい都市雨水問題のﾘﾃﾗｼｰにもとづく情報化社会への接近…… 末石 冨太郎 33

地球環境時代の環境ﾘﾃﾗｼｰとしてのｲﾝﾀﾞｽﾄﾘｱﾙ・ｴｺﾛｼﾞｰ…… 小幡 範雄 35

社会エネルギー論(Socio-energetics)の構想…… 黒石 晋 37

交流論の構築に向けて…… 植野 和文 39

＜シンポジウム 「転換期のリテラシー」＞

提起1…… 中尾 ハジメ 41

提起2…… 日置 弘一郎 42

提起3 政治の教育とリテラシー…… 依田 博 43

社会システム論的生活構造論学説史批判と現代生活情報論の科学性批判

金蘭短期大学　　三石　博行

1、生活構造論の形成過程と高度情報化社会の課題

日本独自の生活研究の一分野である「生活構造論」の源流は戦間期、つまり森本厚吉らの「生活文化論」に見られ生活向上や風早八十二の社会政策論など、第二次世界大戦前の労働者階級の生活向上運動と結び付く実践的な理論として展開したもの、戦時中の社会政策論とも言うべき大河内一男の国民生活研究や篭山京らの労働科学的立場から労働力の生理学的修復過程を生活構造の課題にしたもの、今和次郎のように民族学や文化人類学的な方法論を基に考現学と呼ばれる生活学の科学理論を確立する事によって、「生活の構造」、「生活様式論」や「生活病理」を展開したものがあった。

これらの源流から戦後生活構造論は展開し、経済学的立場からの生活構造分析がその代表的なものとしてあるが、生活構造の変化と生活レベルの変化が食い違う現象、つまりエンゲル関数の非線形的変化現象を履歴現象として説明した中鉢正美や、マルクス経済学的視点から労働力商品と労働力の再生産過程として生活構造を分析した副田義也や、貧困層の生活構造研究を社会学的に行った江口英一らの研究が挙げられる。

さらに構造・機能主義から展開した社会システム論的生活構造の展開も詳しく見れば異なる視角を以てなされていた。例えば、松原治郎の労働力の消耗と再生産の循環体系として、青井和夫の生活行為者とその社会・経済的状況の織りなす生活行為のシステムとして、吉田民人の生活主体とそれを規定する生活環境とによって構成される生活空間の構造・機能分析による生活構造論などが挙げられる。

これらの生活構造論は歴史的にみれば、貧困化問題解決の為に取り組まれた経済学や、労働科学の立場と生活主体や文化的生活の確立の為に取り組まれた考現学や、さらに社会システム論的課題によるものがあると思われる。また、生活構造論もその研究対象から幾つかの分類が可能で、三浦典子によると、生活構造を労働者階級の生活といった階層構造の中で捉える研究や、農村社会学や都市社会学など地域社会学の課題に結び付いて生活構造を生活空間的に捉えようとする研究や、家族や団体の基礎となる人間関係の構成や集団から生活構造を生活主体がその価値観や集団参加の必要や欲望に応じた総合的な集団参与行為のパターンとして捉える在り方がある。

そして生活構造論は、時代の中で変化する生活様式の在り方、そこからの問題提起を受けながら今日まで発展してきた。現代生活構造論が、高度な科学技術文化に取り囲まれ、その為の新たな生活様式が課題になる中で、再度問題にされていると理解することも出来る。つまり、生活構造の課題が生活貧困の課題から、生活主体の生きがいの課題に結び付くとき、かくてのマルクス主義生活構造論は時代遅れとなり、生活様式や生活空間を課題にして生活構造論は新たに展開していった。

2、生活空間論からの生活情報構造

生活情報論は高度情報化する社会の中での生活の在り方を巡って提起されたが、その土台には新たな生活構造論の課題も横たわっている。

パーソンズによると目的志向的生活行為は、動機付けのエネルギーを利用し、社会規範や価値に添って、与えられた一定の状況の中で目的を達成するために目指す過程を取るとされている。つまり、生活はよりよく生きるための行為であり、その生活行為の目標は松原治郎によると、第一点目は生物としての自己保存と同次元である「生命を維持する」こと、第二点目は経済活動として「生計を維持し、豊かに生きる」こと、第三点目は自己完結のための行為として精神的に「豊かに生きる」ことであった。

つまり、貧困化問題について語る経済的生活構造論は衣食住の生活環境を維持する第一点目の生活行為に関する理論と第二点目の経済活動が中心になり、地域社会学の課題に結び付く生活構造論では第二点目の経済的により豊かに生きることが問題になり、最後の第三点目に社会システム論的な生活構造論ではじめて生活主体の課題にふれ、精神的な豊かさ、生きがいが問題になっている。

この生活構造論の歴史的展開自体が、巨大な生産力の発展や民主主義政治制度を発展させた市民社会の社会

経済史的背景の上に成立している。しかしパーソンズ・松原のシステム論からは情報の構造は見えない。何故なら、第三点目の生活行為は社会的規範の範疇に入るので行為は常に常識の安全圏に留まることになる。その行為のみが豊かに生きる内容を持つとされるからである。しかし、現実は、行為主体の人間的幸せが必ずしも、社会的常識の範疇に留まるとは限らない、場合によっては社会的常識を外れ、時代の道徳に反し、その社会の秩序に反する非合法的な行動も豊かさとして語られる場合がある。

そこで、パーソンズ・松原図式を越えるものとして、吉田民人の生活空間の定義がある。吉田民人は「生活空間は一方、主観的=状況的で相互に移行しあう外界・セルフ・エゴの 3 領域に、他方、客観的な一線を原則として画することのできるパーソナリティ・レファレンシャルの 2 領域に分化している。これらの主観的、客観的な分析視角を統合して、生活空間の基本的構造を外界・社会的セルフ・個人的セルフの 3 領域に分けることもできる」と考え、そこから気質的つまり感情的要因、能力的要因、力動的要因、認知的要因の 4 つの要因群からパーソナリティが構成されるした。

この吉田民人の視点はこれまでの意識的領域に留まる行為主体の解釈を越えて、フロイト精神分析の力動的要因もその中に含むものである。行為を欲求次元から捉えることによって、また行為を快感原則と現実則の両面から捉えることによって、その構造が言語のように構造化されていることが前提になるからである。そして生活構造を心理学、社会心理学、社会学、文化人類学、精神分析など人間社会学の見知を総動員して分析し、その多様な形態の解釈を可能にすることができる。生活空間の主体的環境である内的世界の存在と生活空間の実在的環境である外的世界の存在の相互の統一的関係として生活行動が発生していることが理解できる。

3、生活空間と生活情報

生活構造の観念形態として生活情報が存在している。従って、生活行為の定義から生活情報の在り方が理解できる。例えば、竜山京の労働、休養、余暇の要素分類から生活情報もそれら三つの要素に関する情報と言えるし、パーソンズ・松原の生活行為の目標に関する生活情報も生命維持のもの、生計を維持し経済的に豊かにするもの、そして人生の目標を持って精神的に豊かに生きる為のものの三つの要素から成り立っていると考えられる。

生活行為とは意識的にしろ無意識的にしろ、生物的にしろ文化的にしろ、ある志向性をもつ生活空間の中での自己実現のための行為である。そこで吉田民人の言う生活空間の概念の中にではすでに生活情報の概念が前提にされて、その上で生活行為が語られている。例えば生命を維持している遺伝子情報、免疫情報、脳神経細胞のシナップス結合によって作られた情報、神経反射、本能的行為や自我の自己防衛的行為に至まで、自己保存の為の行為を記憶し、呼び起こし、制御し、統制する機能は情報によって組織されている。また、経済的な豊かさを求める行為も、生計を維持していく情報、社会で仕事をするための知識やキャリアと呼ばれる情報等によって成立している。

そして欲望や欲求も幻想であろうとそれらも言語という情報によって呼び起こされ、増殖される、さらにその行為化を通じてし記憶や経験という情報を再生産する。そのため生活情報を語る時、医学、生理学、人間社会学、文化人類学、生態環境学などの全ての知の総動員を借りて対処しなければならない。

我々は昨年、生活情報史観のモデルに基づいて三つの生活情報の構造モデルを提起した。このモデルはと生活情報史観」について昨年研究発表を行った。その中でパーソンズ・松原の生活行為から仮定される生活構造のモデルが展開された。しかし、第三次生活構造については意識的情報世界や体制的価値観と関係なく、その内容を定義した。欲望の全てや病的幻想もその中に入れた。その論理的背景は吉田民人の言わんとする生活空間の定義にあるものと思われる。

参考文献

吉田民人　「生活空間の構造-機能分析」in 作田啓一編『人間形成の社会学』現代社会学講座・有斐閣 1964 年、pp137-196

三浦典子　「生活構造概念の展開と収斂」in『現代社会学』18 号、　アカデミー出版会、1984 年　pp5-27